

SHIMADZU Diversity and Inclusion week2022

「共生社会の実現に向けた社員の勇気とチャレンジ」 ～スポーツで培った力を活かして～

島津製作所 中川 将弥さん
×
オムロン京都太陽 寒川 進さん



「SHIMADZU Diversity and Inclusion week2022」にあたり、京都企業で活躍する障がいのあるお二人に「共生社会の実現に向けた社員の勇気とチャレンジ」～スポーツで培った力を活かして～をテーマに対談していただきました。スポーツ経験も踏まえた共生社会実現に向けた熱いメッセージをお聞きください。

中川 将弥 (なかがわ まさや)
1996年生まれ 奈良県出身
(株)島津製作所 製造推進部 製造管理 G
高校時代、ラグビー全国大会準優勝。大学時代、全国ベスト8の成績を残す。個人としても関西代表、関西ベスト15に選出。
現在は、島津製作所ラグビー部 Breakers の選手としてリハビリに励み、競技復帰を目指す。

寒川 進 (かながわ すすむ)
1968年生まれ 京丹後市出身
オムロン京都太陽(株) 品質環境技術課 課長
長年にわたり全国車いす駅伝に出場し2年連続の京都Aチーム優勝を果たす。2004年アテネパラリンピックでは1600mリレーで銅メダルを獲得。2016年「京都スポーツの殿堂」に選ばれる。現在も各種レースで活躍中。

—寒川さんの障がいについてお聞かせください。

寒川:20歳のときにバイクの転倒事故に遭いました。気が付いたら4時間くらい意識を失っていました。「脚がなんか動かない」という思いの中、立てないよと言われたのが1か月後。当時はかなりショックを受けました。しんどかったし絶望もしました。でも、リハビリを続けて少しずつできることが増えていくと外出できるようにもなりました。その中で車いすのレースに出会ったのが大きかったです。

—車いすのレースにはいつ出会いましたか？

寒川:1990年リハビリをしているときに会い

ました。大きな西大路通りを車いすがすごいスピードで走ってるのを見て衝撃を受けました。いつか私もあのようになりたいと思いました。始めるとスポーツだからいろんなことが起こる。どうしたらもっと他の人についていけるようになるか、普段の生活で何ができるか、どんな練習をしたらいいかなど、四六時中考えていました。しんどいからやめたいと思ったことはない。いまだにそうですね。私自身がこの競技をやめてる自分を想像ができません。常々、「どうしたらもっと早く走れるようになるか」を考えています。

—競技との出会いが、日ごろの生活に生きていることはどんなことですか？

寒川：私の中ではこの競技があって生活のリズムや、安心・安定が生まれています。仕事の中でもより効率的に時間をつくるためにどうしたらいいのか、アウトプットにつなげるためにどうするのかを30年間考え続けてきました。自分の中で基本的にやりたいことが根底にある。やりたいことにすべての行動がつながる。そのあたりが私はぶれません。「こんな人生もあるぞ！やればできるぞ！」というところをいろんな場面で伝えていきたいです。「人間あきらめちゃだめだ」とこの頃よく思います。いろんな失敗があってもそれはひとつの経験だから、それを踏まえてどうしたらいいか考える。なぜそんなに前向きなのかよく尋ねられますが、私自身もわからないです。ポジティブとネガティブの考え方でいうと、ポジティブに物事を捉える方が絶対よいと思っています。次の行動につながる。経験が必ず何かの糧になると思っています。

—その考えに至るきっかけはあったのですか？

寒川：人生の中で、私はすごい挫折をしているので、その意味で今の環境に感謝しかない。多様な事象が起きてネガティブに考えるのは勿体ないという思いです。

—中川さんの障がいについてお聞かせください。

中川：2017年11月25日のラグビーの試合中の怪我でした。相手とぶつかったときに首の骨を折りました。そのプレーの直後は意識もあったし会話もできていたけれど、「動くな！動くな！」と呼ばれる声だけが聞こえました。救急車で運ばれながらも、当時キャプテンをしていたこともあり、自分の怪我よりチームのことが気になったというのを今でも覚えています。病院で検査をして、「下半身不随」と親と医師が話しているのをベッドのカーテン越しに聞きました。その時は信じられなかったし落ち込んだ。すごく泣いた。けれど、なぜか「治る。治らないわけではない」と思いました。悲観的にならず、落ち込むこともなく、今でも治る怪我だろうと思っています。

—その後はどのような生活の様子でしたか？

中川：車いす生活となり、外に初めて出たときは、「周りから見られている」と思い、外に出たくな

い気持ちになりました。当時交際していた今の妻が外に出ようと言ってくれたのをきっかけに、外に出られるようになりました。外に出ると、手を差し伸べてくれる方とそうでない方がよく見えるようになりました。私は、怪我する前も人に手を差し伸べるのが当たり前だと思っていました。車いす生活になって手を差し伸べない人を見ると「あれ？」と感じ、新たな気づきになりました。現在は、講演などでお話させていただく際に、「気づける大人になってほしい」と伝えています。気づくってすごく大事。日常で気づけることは、スポーツの中ではもちろん、いろんな場面で力となっていきます。困っている人に声をかけるのは難しいとは思いますが、できる人が増えていくことが障がい者と健常者が同じように生きていく上で大切なことだと感じています。

—共生社会にしていくなために、どんなことを伝えていきたいですか？

中川：障がいには、多様なものがある。皆さんに発信して、わかってもらうことがまず必要なことだと思います。実は私は排便障がいももっています。そういうことも言わないと伝わらない。ただ車いすに乗っているというだけでなく、他にも障がいがあると理解してもらうことが次につながると思っています。

寒川：私も尿とか排便はまったく感覚がないです。

中川：エレベーターを待っているときに不安はないですか？

寒川：もう30年の経験がありますからね。人生の半分以上は車いす生活ですから。そんなに不安はないです。自分のできないことを人に言うことってすごく勇気がいること。だから、そういう意味でも言いたくない人もいるだろうし伝えたくても伝えられない人もいます。中川さんもそうだと思いますが、私はこれからも伝える役割を担っていきこうと思っています。学校では教わらないこと。こういう体験を伝えることが大事だと。



—他にはいかがですか？

寒川：私は「やればできる」ということを伝えたいと思っています。実は、今年の夏に石垣島に行ってダイビングを体験したんですよ。

中川：すごいですね！私もダイビングをしてみたいです。たしかに、「やろうと思えばできることはある」とすごく思いますね。

寒川：「やってみよう」という一歩を踏み出すのに尻込みをする人も多いです。

—今、新しくやりたいことはありますか？

寒川：私はレース一筋！競技のことばかり考えている。今の目標は日本一の50代。そんなことを思いながら日々勉強しています。障がい者も健常者もやればできるんです。そのような話をすると「寒川さんだからできるんです」とよく言われますが、20歳で事故にあうまではそんなにスポーツもしてなかった。みんなやろうと思えばできます。

中川：私も何か車いすスポーツをやりたいなとは思いますが、ラグビーに未練があります。やりたい欲があるけど、できないことに葛藤がある。このようにお話ができる機会があると新しい世界が広がるなと感じています。やりたいと思えるものに出会ったことは大きな幸せです。仕事でもスポーツでも、なんでもいいから自分の中で「こんなことがやりたい」というのが何かひとつあればいいと思います。私はたまたまそれがスポーツでしたが、他にも色々あると思います。

—やりたいことと仕事との両立についてはどのような考えをおもちですか？

寒川：仕事に対する捉え方は、「すべてにおいて陸上競技があり、その中で安心して競技を続けていくためには生活の安定が必要。そのためにも仕事をしっかりやっている」という位置づけ。ただ、仕事でもスポーツでも、達成感や面白みが感じられるからずっとやりたいと思えます。

仕事の上での達成感を得るために、自己満足ではなく相手に喜んでもらえるような仕事をしたいと思っています。一言「ありがとう」と言ってもらいたい。言ってもらえた本人も嬉しいし、仕事が楽しいと思える。その繰り返しだと思います。その中でも失敗もあるし、叱咤激励もある。厳しい言葉であっても「言ってもらえるのはありがたい」

と思える。注意をするのはその本人に対して期待があるからです。

—昨年管理職になり、どのような変化がありましたか？

寒川：失敗ばかりです。知らないことばかり。まだまだ私自身の知識が足りてないと常々思いながらやっています。これから成長の喜びが…。楽しむように早くなりたいと思います。



—中川さんはどうですか？

中川：仕事の中で知識不足を感じていて、いろいろな人に迷惑をかけていると感じます。でも、すごく「何か恩返ししたい、役に立ちたい」という思いでやっています。あまり成果が出ていないと感じ、だめだなと落ち込むところもありますが、今までラグビーをやってきたときのように「やるぞ!」という気持ちは常にもって仕事に取り組んでいます。その気持ちはなければ逃げていたと思います。負けん気だけは誰にも譲らないし、ぶれずに仕事に取り組んでいます。この気持ちはスポーツで培ってきました。

—会社のサポートはどうでしょう？よかったことはどんなことですか？

中川：上司や周りのメンバーの理解のもと、週一回のリハビリに行かせてもらっています。恵まれていると思っています。

寒川：オムロンという会社が障がい者の社会参加への理解がある会社。スポーツというより仕事に関してすごくやりやすい会社だと思います。管理職にもなり、そこに向かって色々な勉強をさせてもらっている中で、学歴ではなく学習歴を評価する。それまでどんなことをしてきたのかを。そう考えるとすごいなと、私はそこで評価をいただいているその典型かなと。今は（管理職になり）挫折していますが…。

—お2人が考える共生社会とはどのような社会ですか？

寒川：簡単に言うと、いろんな人がいて普通な社会。いろんなバリアがあるので環境の整備も当然必要になるけど、整備されていることが普通になっている社会。健康な人も「それが普通だ」と受けとめているのが共生社会だと思います。そのためにはまず理解が必要なので、私たちからの発信も当然必要になると思っています。

中川：私も障がい者のことを知ってもらうことが必要だと思います。まだまだ健常者が優先される世界になっていると感じます。スロープがあっても、階段が先。そういうところは不便です。そういう整備も必要です。

寒川：30年前から比べるとかなり良くなったなと感じます。当時は「バリアフリーマップ」がありました。「ここに行けば障がい者用トイレがある」とか、「エレベーターはここに行けばある」とか書いてありました。今、マップはありません。どこに行っても障がい者用トイレやエレベーターはありません。ひとつひとつ良くなっているし、いろんな気づきがあって世の中変わってきている。そういう気づきのためにも我々が気づきを与えられるような存在になっていきたいと思っています

中川：例えば、車いす駐車場にコーンが立ててある場合があります。一般の方が止めないようにってことだと思うけれど、私たちからしたら一回車を止めて車いすを降ろし、コーンを移動させてまた車いすを戻して車を駐車しないとイケない。気づいてほしいと思いますが、「私たちが発信することで変えていける。発信することが大切だ」と思っています。心のバリアフリーが広がれば共生社会につながると思っていますね。周りの人に認めてもらいたいなら自分がやらないとだめ。理解してもらうために私たちの方から発信していかないとだめと考えています。



—最後に一言。伝えたいメッセージなどあればお願いします。

中川：偉そうなこと言えないですが、ごみが落ちているときにスルーしている人がいます。気づいていない人、気づいていても拾わない人、いろんな人がいます。私はこれまで出会った人から「気づく」ということを勉強させてもらって、それがいろんなところに繋がると実感しています。知らないふりをする人も多く、学生ができることでも大人ができていないケースも多いです。私も勉強中ですが、仕事だけできていければいいのではなく、普段の生活から気づきによって、目配り・気配りができる人になりたいと思います。行動しないと何も変わらない。人それぞれできることできないことあると思いますが、みんなで「気づきに対して行動すること」を心掛けていきたいです。

寒川：人間感謝の気持ちをもたないとだめだと思います。私が皆さんと出会ってこういう話をする機会をもらったのも感謝。そういう環境の中で生活できていることも感謝。今日も貴重な時間をありがとうございました。中川さん、車いすマラソンにチャレンジしませんか（笑）

